

はじめに

「心の働きの総合的研究教育拠点」(京都大学心理学連合)(京都大学、D-2)(拠点番号D-10)は、2002(平成14)年度文部科学省21世紀COEプログラム拠点形成事業として採択され、2002年10月より、活動を開始した。

高度情報化社会、少子高齢化、地球環境破壊等、未曾有の大変化が急速に進行する中で、人の心の本質を知り、人の心を導くことのできる新しい知の体系が求められている。この時代の要請に応えるため、我々は、実験科学、フィールド科学、臨床実践科学としての心理学を統合し、新世紀にふさわしい融合科学としての心理学を構築することを目指して活動している。

京都大学の心理学は、「創造的で多様な個別活動とその調和」を特色とする。これは京都大学全体の学風でもある。これを活かすため、本COEプログラムでは、3つのレベルで研究活動を推進してきた。第1のレベルは、研究者の自由な研究活動の支援であり、創造性豊かな一次的研究成果を蓄積することがその目的である。これは本拠点の基礎体力を培うものであり、それなくしては高度な総合的活動につなげることはできない。第2のレベルは、「イメージと表象の性質と機能」「身体化される心」「文化・社会的環境との相互作用」「進化と生涯発達」という学際的・国際的研究チームとしての活動である。ここでは各チームが自由にワークショップやシンポジウムを企画し、関連研究者間の情報交換と討論を通じて、知識を集約し、新たな融合的課題や共同研究の可能性を探ってきた。第3のレベルは、心理学連合全体としての諸活動であり、大規模な国際シンポジウムや研究成果の出版、及び新たな教育システムの整備である。

拠点全体としての高度な研究活動を持続する一方、2005年度に特に力を注いだことは2点ある。第1は、基礎系・実践系の融合的研究を強く推進したことである。具体的研究課題を公募し、予算措置をおこなった結果、さまざまな新たな融合的成果が得られた。これらは本報告書にも簡単にまとめられている。第2は、活動開始以来の研究成果のとりまとめと社会への還元のため、研究者向け英文書籍の出版と、一般向け和文叢書の出版を開始したことである。これらの活動は最終年度において、さらに活発におこなわれることとなる。国際交流協定覚書を交わしたミシガン大学との共同研究もさらに発展した。

教育活動においては、基礎から臨床に至る広い視野を持った人材の育成を目指して、部局間のカリキュラムの共通化・相互化をさらに進めている。ほとんどの心理学関連の講義は、他学部・他研究科から自由に履修可能となっている。修士・博士の学位論文審査も、部局規定の制約が許す範囲で、可能な限りの相互化を進めた。2004年度からは学部初級実験を共通化している。2006年度からは、心理学入門のための共通科目が設定される。大学院生への競争的研究経費の支給や国際交流制度により、引き続き若手の育成をすすめている。他のCOE拠点や関連研究グループの協力も得ておこなう国際若手ワークショップを2005年度も開催し、刺激的環境と自由な討論の場を提供した。こうした環境で育った大学院生たちが、近い将来、新たな心の研究の地平を拓いてくれるであろうことを確信している。

本冊子には、本事業第4年度における活動をまとめた。事業計画に続けて、各研究チームの研究成果の要約、融合研究の研究成果、海外拠点形成プロジェクトの研究成果、シンポジウム、研究会、その他の活動等の記録、研究業績一覧、及び直接的・間接的に本事業の補助を受けた若干の既公刊・未公刊論文を収録した。京都大学心理学連合としての活動の一端を知っていただければ幸いである。

なお、本拠点の活動に関する情報は、以下に公開されているので、ご参照いただきたい。

<http://www.psy.bun.kyoto-u.ac.jp/COE21/>

2006年3月16日

拠点リーダー・藤田和生

プロジェクトの内容

「心の働きの総合的研究教育拠点」

Center of Excellence for Psychological Studies

(京都大学心理学連合)

プロジェクトの目的

21 世紀は「心の時代」になるであろう。情報化社会によるグローバリゼーションや少子高齢化など、人類がかつて経験したことがない状況が急速に到来している。物質文明の進歩が人間の幸福に直結しないことも明確になり、未来の予測が困難な中、人々の心は乱れ、さまざまな社会的問題を生んでいる。このような時代にあって心理学の責務は大きい。この緊急かつ重要な責務を果たすべく、我々は、実験科学、フィールド科学、臨床実践科学の連携により、融合科学としての心理学を志向し、新たな知の方法論を切り拓くとともに、未来を展望できる 21 世紀の人間観を創出し、それらを国際社会に向けて具体的に発信する。

後述のように、京都大学においては、認知心理学、発達心理学、比較心理学、社会心理学、脳科学、臨床心理学等のあらゆる分野において優れた研究・教育をおこなってきた。国際的学術誌への論文掲載、学術書の出版、若手研究者の育成はもちろん、各種科学研究費の他、未来開拓学術研究推進事業、科学技術振興調整費などの大型研究プロジェクトにおいても中心的な役割を果たしてきた。多数の国際共同研究が継続的に実施されており、その活動は国内外に高い評価を得ている。

しかし京都大学の心理学における最大の特色は、その相互の協調体制にある。心理的諸機能の認知科学的・脳神経科学的研究からフィールド心理学的研究、動物を対象とした比較認知研究に加え、年間 5800 件を越える心理相談を行っている臨床実践活動に至るまで、多様な心理学領域を専門とする 40 名に近い研究者が、教育・研究両面での柔軟な相互作用によって、独創的成果を生みだしてきた。これは西田哲学や今西学派などの独自の基盤を持ち、個性や多様性を重んじつつ互いに協調し切磋琢磨していく京都大学なればこそその特色といえる。

すでに我々は、30 年以上の歴史を持つ心理学教官連絡会という月例の会合を通じて、常に情報を交換し、学術的交流を深めてきた。2000 年には日本心理学会を共同で開催し、翌年には同連絡会編の書籍（「21 世紀の心理学に向かってー京都大学の歴史と現状ー」ナカニシヤ出版）を出版した。教育面では、数多くの講義を相互履修可能な共通科目に指定し、学部学生や大学院学生が部局超越的な指導を受けられる体制を作ってきた。本拠点形成計画において、我々はこの伝統をさらに飛躍的に発展させ、現在多数の研究科に分散している関連講座を束ね、ヴァーチャルな研究科のように機能する連合組織ー心理学連合ーを構想した。

このような部局超越的な教育・研究環境のもとで、今後 5 年間に取り組むべき共通の問題空間として下記に挙げる 3 項目を設定する。この問題空間に対し、実験からフィールド、臨床に渡る多様なアプローチにより相互に連携しつつ研究を推進し、欧文による学術論文や書籍の公刊、国際シンポジウム、定期的な研究者、大学院生の相互国際交流などを通じ、心理学の世界的研究拠点として、その成果を発信する。またその成果を踏まえた臨床実践活動を通じて、広く社会に資する貢献を目指す。さらに、言語学、社会学、人類学、精神医学といった隣接領域との相互作用により、より総合的な人間学への道をも探る。

プロジェクトの視点

今後5年間の研究を収斂させるため、我々は「心を知り、心をはぐくむ」という共通テーマを設定した。このテーマが構成する問題空間には、図1に示す3つの下位空間がある。

1. 自然的現実との相互作用：心の基礎的構成要素はどのような生物学的起源をもち、システムとして統合されているのか（図1右）

心の生物学的基盤に関わる問いの総体である。生物としての人は物理的環境と人的環境に取り巻かれている。これら環境内の事物の認識、他者や集団、文化との関わりなどがこの問いに含まれる。これら諸過程を決定する環境的・個体的要因を同定し、その相互関係を明らかにすることが中心課題である。

2. 社会的現実との相互作用：人の心は他者との関係においていかに生成され、社会的現実の中でどのような在り方をするのか（図1左）

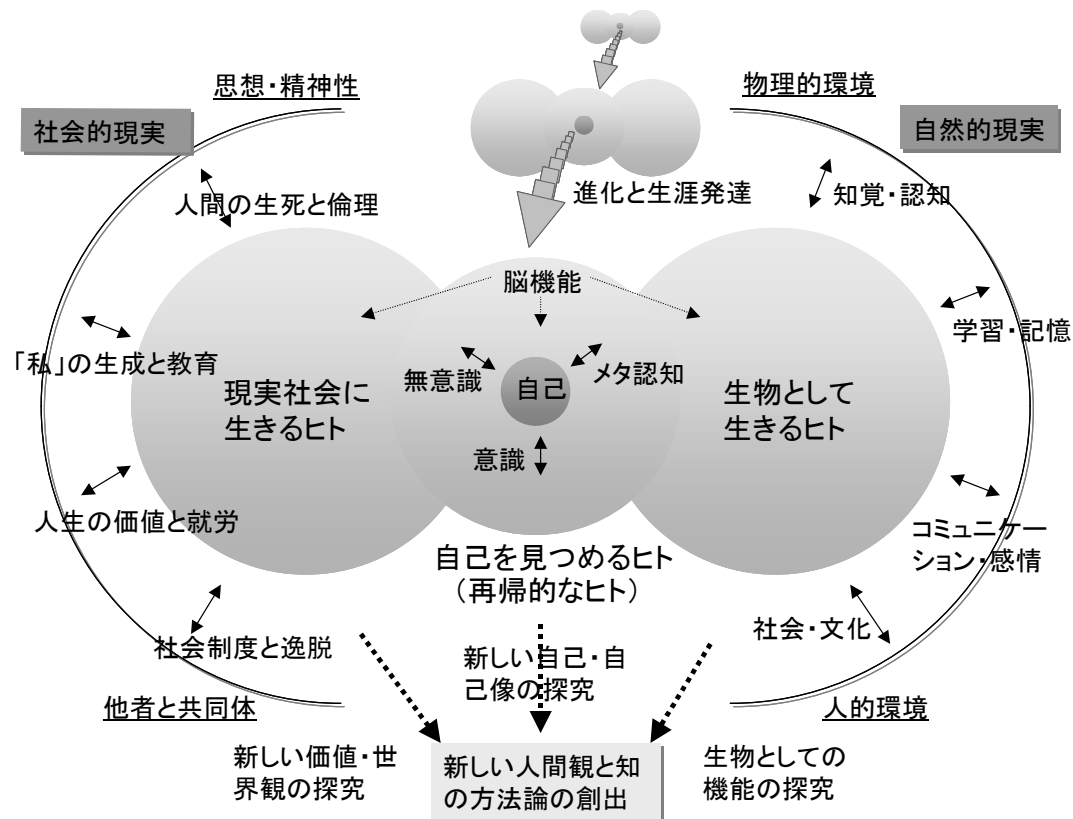
他者の中に生まれる人は、常に変化する文化・社会・歴史的環境の中に生きており、それに対応するよう求められる。その対応様式の解明や、制度や規範といった社会的現実に対応しきれない場合に生じる問題とその対処法のみならず、人が現実社会に働きかけていく心の過程についても、心理臨床実践からの知見を基盤にして検討する。

3. 内的現実との相互作用：自らの営みを再帰的に反省する自己理解の様相と働きは何か（図1中央）

人において最も発達している自己モニタリング機能、自己意識に関わる問いの総体である。自己は自身の内部に存在する第3の環境ともいべきものであり、人は常にそれを生みだし、またそれと相互作用しつつ行動を決定している。人の最大の特徴とも言えるこの自己との相互作用はいかにして形成されるのか、実際いかに機能しているのか。これらを明らかにすることがこの問いの中心課題である。

さらに、これら3つの心的機能は、必然的に時間を追って変容してゆく。経験による短期的な変化から、数十億年に及ぶ生命の進化史に至る、異なる時間尺度における発生過程の理解なくしては、動的変容を遂げる個体や民族、さらには種全体の心の性質を正しく理解することはできない。また、あらゆる心的機能は、その神経系によって実現される。したがって、これを実現する脳機能の解明も必然的に重要課題として位置づけられる。

このように、心が投げかける問題は多様でかつ複雑である。この広大な問題空間の総体を、我々は「心の宇宙」と名づけ、この空間内に個々の研究課題を位置づけることにより、心の総合的理解を目指す。



【図1】心の宇宙

研究課題

最重要課題として、上記3つの下位問題空間に以下の4研究課題を位置づけ、個々の課題を推進するとともに、それら相互の関連性を解明することを通じて、心の働きの総合的理解を目指す。

A. 「イメージと表象の性質と機能」

チームリーダー： 苧阪

サブリーダー： 大山*、齊藤

メンバー： 石原*、岡田*、皆藤*、河合、久代*、楠見、齋木、櫻井、田中*、友永*、藤田、藤原*、船橋、やまだ、山本*（五十音順、*研究協力者）

心の内部に構成されるイメージや表象は、環境や社会や自己の認識の基盤を提供する。例えば事物の認識は感覚器官から手に入れた刺激と主体が持つ内的表象の照合過程である。記憶再生は、過去経験を心的表象として再構成することである。また社会・文化的に構成されたイメージや表象は、人の思考や感情を方向づけ、行動を組織する。人は内的自己と表象とを対話させ、それにより過去の経験を反芻し、現在の行動を決定し、将来の行動を計画する。心を制御する最大の要因である表象やイメージは、いかにして形成され、いかなる性質を持ち、いかに機能するのか、またそれは脳内でいかに実現されているのか。これらは心の基礎的機能を理解する上でもっとも重要な課題である。

B. 「身体化される心」

チームリーダー： 伊藤

サブリーダー： 蘆田、松村

メンバー： 板倉、角野、河合、桑原、内藤、吉川、和田⁺（五十音順、*研究協力者、⁺特任助手）

心の諸機能はすべて身体において実現されている。身体を離れて心は形成されず存在し得ないという認識は、近年心を理解するための新たな枠組みとなりつつある。例えばボールの大きさや形や重さは、それを持つ手の開き具合や筋緊張を通して認識される。また主体の内部に構成された社会的身体と生物学的身体の整合性を保持することは、人が社会的存在として生きるための基礎を提供する。基礎的外界認識における心身の相互作用を実験心理学的に分析するとともに、身体疾患における心理的側面の解析、遺伝子治療、移植医療などに関わるカウンセリング等の実践から、医学や自然科学への提言につなげる示唆を得る。

C. 「文化・社会的環境との相互作用」

チームリーダー： 杉万

サブリーダー： 桑原、吉川

メンバー： 松沢*、渡部（五十音順、*研究協力者）

心というシステムは、人自らが歴史的に作り上げてきた環境の中で機能する。人を取り巻く環境は人が自身を社会の中に定位する枠組みを提供する。近年極めて基本的な認知にも、主体がその心を培ってきた環境の影響が存在することが示されている。こういった深甚な社会や文化の影響は、いまだ十分に理解されているとは言えない。一方、社会的現実と向き合う主体にとっては、文化・社会的な環境とその急激な変化に対応できないことから、様々な心理的問題が生じてくる。臨床的実践を通じて、このような問題の解決を探っていくことが急務である。

D. 「進化と生涯発達」

チームリーダー： やまだ

サブリーダー： 板倉、田中*

メンバー： 遠藤*、子安、友永*、藤田、松沢*（五十音順、*研究協力者）

あらゆる心の働きは時間軸に沿ってダイナミックに変化する。特定の心的機能に関するモデルは、その機能の時間的変化をも予測可能であるべきである。系統発生と個体発生の過程を、進化的比較、世代間比較、生涯発達比較等を通して明らかにする。臨床実践においても幼児期からの生育史やライフストーリーは問題行動の理解と治療に重要である。臨床実践と生涯発達をアクティヴに連結し、説得力のある社会政策や教育政策を提案する。心の発生過程を理解することなく、心の将来を正しく予測することはできない。

2004 年度に追加された方針

感情科学の構築： 情動 (emotion) に関する研究を、重要課題として取り上げる。情動は多くの認知活動と相互作用を持ち、人の行動を規定する大きな要因である。これを拠点全体の中心課題として位置づけ、情動が認知・行動におよぼす影響およびその適応的機能について比較認知科学、神経科学、心理実験、臨床実践など多様な観点から分析する。外界の刺激に対する情動喚起・表出の心的機能、他個体の情動状態を認知し自己の行動調節に利用する心的機能、およびそれらを可能にする神経機構の解明は、ヒトの社会的知性の根幹に迫る特に重要な課題である。これらについて、神経生理、行動実験、機能イメージング、質問調査等の多様な手法を用いて分析する。又、情動のもつ病理的側面、情動の社会文化的側面についても検討する。

基礎系・実践系融合プロジェクトとして推進する課題

1. 「共感的対話」における相互作用性に関する臨床心理学的・認知心理学的・社会心理学的研究 (桑原、吉川、渡部)

臨床心理学では、カウンセリングにおけるセラピストとクライアントの対話において、「共感的な関係性」が重要な意味を持つと言われている。しかし、こうした「関係性」の本質については、主観的、経験的な解釈論にとどまり、実証的な研究がおこなわれてこなかった。本課題では、「共感的対話」の中で起こっている相互作用性に注目し、臨床心理学、認知心理学、社会心理学の視点から多角的に分析する。具体的には、顔や表情、音声や間といった視聴覚情報、そして関係性の認識やそれに随伴する対人印象の変化といった心理指標を模擬臨床場面で測定し、そこでの指標の変化と実際のカウンセリング現場での当事者の関係性の変化がどのように対応しているのかを明らかにする。

2. 遺伝情報と意思決定に関する臨床心理学的・社会心理学的・認知心理学的研究 (伊藤、楠見)

遺伝医学の発展により、病気に関与する原因遺伝子の研究が急速に進み、こうした知識が、就業・結婚・出産などの人生の大きな選択に影響を与えるようになってきている。遺伝情報に基づく意思決定には、将来の発病リスク、子孫への遺伝、血縁者とのリスクの共有、などという特質による独自の難しさがある。またそれは、知識の次元を超えた心の次元—個人の不安や人間関係のあり方などが情報の受け取り方そのものを変え、意思決定に影響を与えるという性質がある。本課題では、リスクに対する感受性の個人差や感情、対人関係などに関わる個人の認知的特性が、こうした情報の受容や意思決定にどのような影響を与えるのかについて、臨床的手法、社会心理学的手法、及び認知心理学的手法を用いて明らかにするとともに、当該個人の最大限の幸福を実現するための方策を探る。

3. 注意欠陥/多動性障害 (ADHD) を克服する方策に関する研究 (船橋、板倉、伊藤、角野*)

注意欠陥/多動性障害(ADHD)は本邦では4%程度の児童に見られる。集中力の不足、衝動性、気分の易変性その他の行動上の問題から、自身には学習障害を生じ、周囲の児童に対する影響により「学級崩壊」と呼ばれる無秩序状態を生じる場合があると言われている。しかし社会問題として注目を浴びている反面、ADHDの克服策としては児童本人や家族に対するカンセリングが中心で、ADHDに関する基礎的研究は少ない。ADHDと診断された児童間に見られる障害の多様性、薬物に対する効果の多様性などから、ADHDが単一の要因により生じた障害であるとは考えられない。心理学的、臨床心理学的、神経科学的方法を組み合わせることにより、ADHDの行動学的な分類、各分類群の要因の解明をめざすとともに、ADHDを克服するための具体的方策の確立をめざす。

教育課題

目的

次代の心理学を担う独創性に富む人材を育成するため、大学院教育に関する諸改革を実施する。

大学院教育に関する主たる施策は、①研究活動を支援するカリキュラムの新規開設、②研究指導の部局超越化、及び、③現在多部局に分散して実施されている大学院教育カリキュラムの統合と、④それに伴う基礎教育カリキュラムの共通化である。共通科目の設定、心理学セミナー（懇話会）、国際セミナー等、その一部はすでにおこなわれているが、これをさらに大規模な統合へと発展させたい。これらを通じて、広い視野を持ち、基礎心理学と臨床心理学の双方を深く理解し、京都大学の独自性を持って世界最先端で活躍する人材を養成する。この教育システムにより、我々は、基礎と臨床が融合した心の総合的理解を、さらに確実なものへと進展させたい。なお、これらはいくまで教官は個々の部局・講座に所属したままで実施されるヴァーチャルな心理学連合の新規教育活動であり、組織改編や教務事務処理の改変を伴うものではない。関連講座は以下の通りである（*は協力講座、教員の配置換えにより、情報学研究科・知能情報学講座は16年度をもって関連講座から除外された）。

文学研究科<行動文化学専攻・心理学専修>

教育学研究科<教育科学専攻・教育認知心理学講座、教育方法学講座>/<臨床教育学専攻・心理臨床学講座、臨床心理実践学講座>

人間・環境学研究科<共生人間学専攻・社会行動論講座、認知科学講座、行動制御学講座>

高等教育研究開発推進センター<高等教育教授システム研究開発部門*>

生物科学研究科<霊長類学専攻・思考言語分野*>

現状と今後の課題

次代の心理学を担う独創性に富む人材を育成するため、連合組織として以下のような具体的な大学院教育に関する諸改革を計画した。以下にはその実現状況と、今後の課題について述べる。

(1) 大学院生の研究活動に関わる施策

- a) 「心理学の最先端」セミナーの開設 教官が自らの最先端の研究成果を報告し、大学院生とともに討論する研究会を不定期に開催した。動機づけを高め、討論の成果を研究に活かす機会を提供した。
- b) 国際大学院生交流の推進 最長3ヶ月間に及ぶ院生の招へい/派遣を実現した。
- c) 国際心理学セミナーの定期開催 海外の一流研究者の講演会を不定期に16回開催した。
- d) 心理学懇話会の定期開催 国内の関連研究者の講演会あるいはセミナーを不定期に10回開催した。
- e) 部局間研究グループによる共同指導 4つの研究テーマ別におこなわれた(1)・aのセミナーが、部局間研究グループによる共同指導体制として機能している。

- f) 大学院生研究発表会の共同開催 多くの国際シンポジウム・ワークショップにおいて、内外の若手研究者（主として大学院生）のポスター発表の場を設けている。若手研究費(大学院生養成プログラム経費)の受給者の発表会を18年3月に予定している。
- g) 指導教官互換性の実施 大学院生は自由に他部局の心理学連合所属教官の実質的な指導を受けることができる。
- h) アカデミックイングリッシュコースの開設 15-17年度に、英語による研究発表指導の専門家を招いて、模擬国際会議の形態をとった研究発表及び討論演習をおこなった。18年度にも開催を予定している。
- i) 臨床実践を支援するシステムの整備 臨床実践を志向する大学院生を、連携した医療・司法・教育施設に派遣し、現場での教育・訓練をはかるとともに、連携機関から研究員を受け入れて、心理療法に関する訓練・研修を積ませている。

(2) 講義・単位に関わる施策

- a) 大学院共通科目の新規開設 上記4つの研究テーマに対応する共通科目としての演習の開設を企画したが、実質的にそれに代わるものを(1)-a、e、fで提供しているので、現在のところ実施していない。
- b) 大学院単位完全互換性の実施 制度は変えないまま、各部局で開講されている講義等の多くを相互に当該部局の講義として登録することにより、ほぼ実現した。
- c) 修士論文審査の共通化 論文審査員副査を他部局からも選定した。ただし、部局規定の制約により、完全には実現していない。
- d) 博士論文審査の共通化 論文審査員副査を心理学連合所属の教官から自由に選定した。

(3) 学部学生に関わる施策

- a) 講義等単位の完全互換性の導入 (2)-bと同様の解決策をとった。
- b) 心理学導入教育の実施 当初に企画した1回生向けの少人数のゼミナール方式は断念したが、18年度からは心理学連合提供共通科目としてリレー講義が開始される。
- c) 2回生向けの初級実験の共同実施 16年度から文学部、教育学部、総合人間学部において実施している。
- d) 卒業論文指導及び審査の部局超越化 学部学生についても、卒業論文を始めとする研究指導は他部局の心理学連合所属教官の実質的な指導を受けることができるので、特に制度としては設けなかった。